
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 59, 2021. 3

内田 亨先生小伝 (3)	-----	故山田 真弓	1
新渡戸稲造展：『武士道』執筆の中、新渡戸が採集した植物標本	-----	佐藤 広行	4
夕張市石炭博物館について	-----	澤出 有里	5
チェンバロと津曲先生の思い出	-----	新妻 美紀	6
寺西さんを偲んで	-----	ロバート・クルツ	7
平成遠友夜学校の紹介	-----	岡本 敏博	8

特別寄稿

内田 亨先生小伝 (3)

北海道大学名誉教授 故山田真弓

幸いに札幌は戦争の直接の被害は受けなかった。しかし戦時中及び戦後の日常生活は苦しく、それは先生も同様であったと思われる。実験などをする上での不便さは大きく、外国との交流はほとんど不可能ではあったが、先生はなんとかできる勉強をしようと努力されていた。戦後すぐにはそれまでの犬についての研究を一般の本としてまとめられた「犬の本」が出版された。また戦時中に研究をされた「南太平洋産クラゲ類」、「下田付近のクラゲ類」が出版されたのもこの頃であった。また研究指導にも出来るだけのことをされ、戦時中から戦後にかけては、常木勝次（ハチの分類生態）・青戸偕爾（両生類の雌雄性）・西田好輝（昆虫の感覚生理）・久保和美（ヒトデの発生）・森田弘道（昆虫の感覚生理）・岩田文男（ヒモムシの分類）・疋田豊彦（魚の分類）・坂上昭一（ハチの分類生態）・それに筆者（ヒドロ虫の分類）などが先生の指導を受けた。

戦後すぐの頃は紙の不足やまた東京の印刷所が機能を失ったことで、図書雑誌の出版が極度に困難になった。とくに学術雑誌が発行されなくなった。幸いに空襲の被害を受けなかった札幌ではある程度の紙と操業できる印刷所が残っていた。内田先生は牧野佐二郎博士と一緒に札幌の「北方

出版社」という所からの「生物」という学術誌の定期刊行に努力された。この雑誌は全国の生物学者に広く受け入れられたが、次第に東京の出版界が復興するにつれ、結局第4巻まで刊行されて終刊となった。しかしその刊行の意義はきわめて高いものであった。

内田先生はお父上の影響か、若いころから文章を書くことに興味をもっておられ、またご自分の書かれた原稿が活字になって印刷物として出来上がって来ることに深い喜びを感じておられた。東大での大学院時代に鈴木三重吉氏の「赤い鳥」に生物についての小文を書かれたりしたことがあった。戦後すぐの生活の最も困難な時代に先生は



図 4 動物学会支部大会で。函館北大水産学部。1950年8月。

またこのような一般向けの文章をいくつも書かれ、それらをまとめて出版された。「蜜蜂と花時計」で、199 ページ、昭和 21 年北方出版社からの刊行であった。紙も装丁もかなりお粗末ではあったが、殺伐な世相の当時の人々にとっては新鮮な内容と文章が好評であった。先生が喜ばれたのはいうまでもない。その後も先生は晩年まで新聞やさまざまな雑誌にいろいろな文章をかかれることが多かった。自然のこと、ご自分の生い立ちのこと、恩師のこと、研究のこと、外国旅行のこと、など内容はさまざまで、ときどきそれらをまとめて 1 冊の本とされた。

昭和 25、6 年頃になると、ようやく世の中も落ちついてきて、大学のなかも次第にもとに復するようになってきたが、新制大学への切り替えその他で、当時教室主任を何度もされていた先生は何かと多忙であった。小熊教授は定年で形態学講座は牧野佐二郎博士が教授に昇進されたばかりであり、また発生学講座はいまだに設置が認められず農学部の犬飼教授が兼任のままであった。

海外諸国への渡航も少しずつ可能になってきた頃であったが、昭和 28 年夏に先生はコペンハーゲンでの第 14 回国際動物学会に日本代表として出席されることとなった。江崎悌三博士も一緒であった。約 25 年ぶりのヨーロッパ再訪で懐かしい多くの学者たちと旧交をあたためられ、また多くの新しい友人たちと交歓された。外貨の厳しい時代で、ゆっくりとした旅行は望めなかったが、学会後は北欧・英国・ドイツなどを訪れ、戦後の大学や研究所の現状を視察して廻られた。



図 5 来日の 2 学者と共に。向かって右より内田先生、A. Remane 博士、G. Thorson 博士。北大理学部温室にて。1961 年 10 月。



図 6 傘壽のお祝いの席での内田先生。東京新宿にて。1977 年 10 月。

先生は昭和 32 年に 60 才の還暦を迎えられた。63 才の定年まであと僅かであったが、その前後先生の講座には新しい学生たちが毎年何人かずつ入っていた。名前をあげると、石橋貴昭（昆虫の感覚生理）・江原昭三（ハダニの分類）・鈴木健二（昆虫の感覚生理）・広

崎芳次（魚の生態）・美甘和哉（両生類の雌雄）・小黒千足（甲殻類ホルモン）・高橋裕哉（両生類の雌雄性）・菊地昶史（水棲動物生）・林田和男（アリの生態）・正富宏之（鳥の生態）・長尾善（ヒル、ヒドロ虫）・小西正一（鳥の生態生理）・村松晋（イソギンチャク）・森谷清樹（ミツバチ）・塩川信（ハチの分類）などの諸君であった。

先生はこの頃も絶え間なく次々と論文を出されていた。そして昭和 34 年にはまた米国とヨーロッパへの旅行をされた。2 月から約 4 カ月間、ウィッチ教授の計らいで米国アイオワ大学の客員教授として無脊椎動物発生学の講義をされた。その後ヨーロッパへ渡られ、7 月にはロンドンでの第 15 回国際動物学会に出席、さらにそのあとナポリの臨海実験所で約 3 カ月間おもにナポリ湾のクラゲの研究をされた。ナポリには当時筆者が滞在中で、先生から親しくご指導を受けた。その後先生はイタリアからギリシャに立ち寄られてアテネ大学に旧友のパンダッチ (Pandazis) 教授を訪ねられた。帰国されたのは 11 月だった。

先生は翌年 9 月にも米国へ行かれた。カリフォルニアのアシロマーで開かれた「下等無脊椎動物の系統」についてのシンポジウムに招かれての出席のためであった。

昭和 36 年 3 月に先生は定年により北大を退職され、名誉教授になられた。ちょうど 30 年余りの北大在職であった。

上にも述べたように内田先生の動物学研究は、系統分類学、感覚生理学、雌雄性的の実験的研究の



図7 内田先生とB. Rensch 博士夫妻。
ドイツ Münster の同博士宅にて。
1981年8月。

3 つに大きく分けられる。このうち先生がどれに最も力を注がれたかはよく分からないが、筆者には多分平等だったかもしれないと思われる。しかし先生は晩年「自分は系統分類学者(systematic zoologist)」といわれたのを筆者は聞いたことがある。けれども多分先生の“系統分類学”の意味はかなり広くて、あとの2者と共通の部分もあるのではないだろうか。するとこのような分類をすることは、あまり意味がないことかもしれない。

筆者は先生から主にヒドロ虫類の系統分類について長い間ご指導をいただいたが、いつも先生がいわれたことは、“分類は死んだ保存標本を調べるだけでは駄目だ、生きているものを見なければいけない、その分類群について形態ばかりでなくその発生・生活史・生態などを広く調べる必要がある”ということであった。

上の“死んだ保存標本を調べるだけでは駄目”というのは、そのような保存標本の研究が不必要とっておられるのではないことは言うまでもない。これは北大を退職されたあと、国際動物命名法委員会の委員を長年務めておられたことから明らかである。ただ命名法の細かい文言の解釈などについては、かなり苦勞をされていたようであった。

北大を退職後数年は札幌と東京とを行き来しておられたが、やがて東京の狛江に新しい住居を定められ、30余年ぶりにまた東京の生活に戻られた。日本女子大学、また茨城キリスト教大学の教

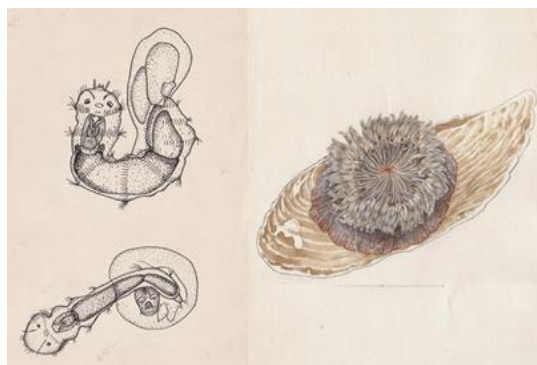
授も務められた。

与えられた紙数がもう尽きたので東京へ戻られてからのことについてくわしく述べることは出来ないが、勉強に親しみ、また余暇を楽しまれた。研究については、毎年いくつかの論文を必ず出版され、また日本動物学会・動物分類学会などへの出席も欠かせられなかった。どちらの学会も会長を務められ、また後には名誉会員になられた。先生はいつか“いつまでも少しずつでも研究は続けて行きたい、坂道をのぼる荷車のように一度とまるとまた動かし始めるのは大変なんだ”と言われたことがあった。

先生はかなり晩年までお元気であった。しかし晩年は次第に足腰が弱ってこられ、最後には車椅子を利用されるようになった。しかし車椅子で列車や飛行機に乗られ、昭和56年8月には親類の方をお供に久方ぶりのドイツ旅行を楽しまれた。この時のくわしいことはとうとう先生から伺うことが出来なかったが、旧知のレンシュ(Rensch)博士やウエルナー(Werner)博士などを訪ね、楽しい日をすごされたという。そしてその翌9月に札幌で開かれた動物学会の大会にも車椅子で出席され、ペケレット湖畔で行われた懇親会でジンギスカン料理を楽しまれた。しかし公の席に顔を出されたのはこれが最後で、札幌から東京へ戻られてわずかひと月後の10月27日に心不全のため息を引き取られたのである。

先生と奥様の四十枝様とのあいだにはお子さんがなかったが、後に養女多仁子さんを貰われた。奥様も昭和60年に亡くなられた。お二人のお墓は鎌倉霊園にある。

(完)



内田享先生のスケッチ。左：多毛類の一種
右：イソギンチャクの一つ
(北大理学部生物学科 HP より)

活動報告

新渡戸稲造展：『武士道』執筆の中、新渡戸が採集した植物標本

資料部研究員 佐藤広行

2018年頃、植物ボランティアさんと標本整理中に、未整理標本から古く痛んだ新聞紙に包まれた状態で、新渡戸万里子・稲造が採集したとある約50点の植物標本が見つかりました。どのような植物を採集したのか同定を試みましたが、標本の状態が悪く、先延ばしになっていました。しかし、いつまでも標本庫に眠らせたままよりも、貴重な標本が存在する事実を公表すべく、研究途中のものです。ミニ展示として公開しました。

新渡戸稲造は札幌農学校2期生で、妻万里子(旧姓：メアリー・エルキントン)と共に様々な事情で就学出来ない学生のため、無償で教育が受けられる遠友夜学校を設立したことで知られています。また、1900(明治33)年1月に米国で著書『Bushido: The Soul of Japan(武士道)』を出版しています。

見つかった標本のラベルから、アメリカのカリフォルニア州ロスガトスやサンタクララバレーで採集されたことが分かります。ラベル作成は、筆跡から親友の札幌農学校で共に学んだ初代北大植物園園長の宮部金吾によるもので、宮部が標本を受け取り保管していたと考えられます。

今回の展示は植物名が分かっていない段階のものを展示していますが、「標本」には多面的な価値があります。希少な標本で標本そのものに価値があるもの、採集者が著名な人物で価値があるもの、採集年が古く希少なもの、採集地が特殊で価値があるもの等です。これらの価値を保証するものが「標本ラベル」になります。

1900年1月に新渡戸稲造は『武士道』を出版しますが、その前年には札幌農学校を退職し、メアリー夫人と共にカリフォルニア州にて静養しています。執筆には時間を要するのは想像に難しく、標本を採集した1899年はまさに『武士道』執筆中であったことは間違いありません。夫妻が結婚したのはペンシルバニア州のフィラデルフィアで、静養地にカリフォルニア州を選んだのは、東海岸を見ているので、西海岸も見たいと思ったのでし

よう。

妻メアリーとの静養の間、自然散策しながら植物採集していたのは、稲造にとっては心休まる日々であったことでしょう。標本には海岸で採集したであろう植物もあります。

標本を眺めると、夫妻で海岸を歩いている姿が思い浮かぶようです。

標本ラベルには採集者として「メアリー&新渡戸」と書かれ、レディーファーストなのが新渡戸稲造らしい紳士さを感じます。健康的に困難な状況を支えてくれた妻への感謝もそこから読み取れるようにも思います。それと同時に、この標本は、時代的背景を織り混ぜることで、稲造の静養と執筆を支えた妻メアリーの夫への愛の深さも感じさせる貴重な標本なのではないでしょうか。

この標本が物語る夫妻が共に過ごした静養期間の日々が、著書『武士道』にどのような影響を与えたのか、興味深いところです。

標本は一見価値が無いようなものでも価値が出てくるのが面白く、收藏・管理する意義があるというものです。



『Bushido』(復刻版) 1900年10月5日出版、裳華房、東京



特別展示(ミニ展示)の様子
(展示期間: 2021年1月5日~2月12日)

活動報告

夕張市石炭博物館について

研究支援推進員 澤出有里

この度ボランティアニュースの皆様からお話をいただきましたので、前職で携わっていた夕張市石炭博物館について少しご紹介しようと思います。私は北大総合博物館にて勤務を始める前は3年間、夕張市の地域おこし協力隊として勤務しておりました。私に与えられたミッションはもう1名の地域おこし協力隊とともに夕張市石炭博物館の改修事業を進めるというものでした。

夕張市石炭博物館は1980年に開館し、国内でも有数の炭鉱関連の資料を収蔵する博物館でしたが、30年以上の年数の経過により展示内容の更新が必要となったこと、また長らく観光施設としての位置づけであったことから十分な博物館機能の維持ができておらず、市民との距離も開いてしまっていたことなどから改修事業の実施が決定しました。事業としては2か年をかけて実際の石炭層が見られる模擬坑道と展示のある博物館本館の改修を行うというもので、約7億4千万円をかけての改修工事となりました。

初年度は国の登録有形文化財に指定されている「旧北炭夕張炭鉱模擬坑道」の改修工事を行い、坑道内部に設置された坑枠の内側に新たな枠を設置、腐食した木材の交換や防水シートの設置などを行い、経年劣化で傷んでいた部分を炭鉱の技術を使って直しました。「模擬」とついていますが、実際に訓練などでも使われていた本物の坑道です。石炭層があるため一部では崩落の危険性などもありましたが、この改修工事により安全に見学することができるようになりました。しかし2019年の火災により内部を損傷、現在は見学することができません。市は有識者会議を設置し、再開に向けての道筋を模索していますが、現状ではまだ見通しが立っていないようです。この坑道は市民にとっても思い入れの深い場所であり、再開に向けて前向きに検討し続けてもらいたいと思っています。

2年目には博物館本館の改修を行い、担当者

として展示、建物改修全体のプランを検討、工事業者や市建築担当者との打ち合わせを通して最終的な改修案をまとめました。経年劣化による補修に合わせ、これまではなかった企画展示やイベントが行えるスペースを1階に設置、展示についても時系列で夕張市の始まりから財政破綻までを通して知ることができるものに一新いたしました。展示の構成を練り、一つ一つテキストを作っていくという作業は非常に大変なもので、工期が決まっているなかでの作業はプレッシャーのかかるものでした。

改修工事を終えて2018年にリニューアルオープンしたあとは、多くの方々に自分たちが手掛けた展示を見ていただき、特に市民の方々から好評の声をいただけたことはとても嬉しかったです。残念ながら現在は夕張市石炭博物館からは離れてしまいましたが、当初想定していた博物館機能の回復や市民とのつながりなどが達成されていくよう願うばかりです。

この3年間の活動を通して、これまで関心の少なかった博物館というもの、学芸員という仕事に興味を持ち、現在の仕事に繋がっていると感じます。仕事以外の部分でも夕張郷土史保存研究会という団体を立ち上げ、写真保存の活動などを進めているところです。仕事や個人的な活動を通して、博物館とは何かについてもっと学んでいきたいと考えています。



夕張市石炭博物館の全景

追悼

チェンバロと津曲先生の思い出

チェンバロボランティア 新妻美紀

コロナ禍で総合博物館の休館もしばらく続き、再開された今も活動の自粛が続いています。立入り禁止の時期には、チェンバロの様子を見に行くことが出来ず、とても心配でした。約1ヶ月半振りに見たチェンバロはチューナーの針が振り切れるほど音も狂い、悲鳴をあげているようにもみえました。初めは手をつけられませんでした。製作者の横田誠三さんにご教授頂きながら、少しずつ元に戻すことが出来るようになりました。

これまでの活動や、足を運んで下さった方々のお顔も時々思い浮かべながら、メンテナンスを続ける中、津曲敏郎前館長が2020年11月7日に亡くなられたとの訃報に接し、驚きと悲しみに打ちひしがれ、先生との思い出が巡ります。

2012年8月17日には、津曲先生が北大定年退職後館長をされていた北海道立北方民族博物館(網走市)の特別展(2011年7月~10月)のテーマソング「フレップの頃」を歌われている富山大学の呉人 恵先生とメンバーによるコンサートを津曲先生が企画され、ロシア民謡、ウィルタ民謡など様々な曲をギター、ウクレレ、リコーダーとのアンサンブルで、楽しいコンサートでした。

また、耐震工事で休館中には、チェンバロが情報教育館で保管されていました。そのホールでポプラ三味線との共演を提案され、三味線奏者の甲地利恵さんを紹介して頂きました。ポプラ三味線は、2016年3月21日に初めてその音色を皆様にお届け出来ました。

甲地さんは、アイヌ文化を研究され、偶然にも私が幼少期に習っていたピアノの近藤鏡二郎先生もアイヌ民謡を研究され、「ピリカピリカ」が、私の中でもずっと耳に残っていた曲で、この曲を三味線とチェンバロで演奏し、懐かしい記憶がよみがえりました。ポプラでつながる和洋の楽器が、津曲先生の発想で実現し、ユニークなコンサートでした。

一番の思い出は、2014年11月23日、先生のギター演奏と学生たちのコンサートです。本番前の休館日にも熱心に練習に来られ、チェンバロの蓋を全開にすると、ギターの音量が負けてしまうため、先生は手作りで、蓋を半分にする棒を作ってこられ、手先の器用さにも驚きました。演奏への妥協を許すこともなかったです。先生の優しいお人柄が表れるような、ふんわりと気持ちが和らぐようなギターの音色でした。コンサート後の打ち上げでは、学生たちにも優しい眼差しと興味深いお話しで、盛り上げて下さいました。

ミニコンサートにも度々足を運んで下さり、また共演もお約束していたのに残念です。先生と一緒に演奏した映画「ディア・ハンター」のテーマ曲 カヴァティーナは、その後チェンバロソロでもよく弾くようになりましたが、先生を思い出す哀しい曲になりました。

津曲先生へ心より感謝を捧げ、ご冥福をお祈り致します。



リハーサルでの津曲先生との練習
(2014年11月23日)



ポプラ三味線コンサートの打ち上げで。左側手前が津曲先生、右側奥の方が三味線の甲地利恵さん。
(2016年3月21日)

追悼

寺西さんを偲んで

翻訳ボランティア ロバート・クルツ

寺西辰郎先生との出会いは四半世紀以上前のことであり、非常に幸運なことであった。私は文学部で25年間教えて来たが、それをちょうど終えたところであった。しかし、まだまだ元気で65歳という若さ(!)で引退したくはなかったので、大学の各学部をまわって自分にお手伝いできることはないかと尋ね歩いた。帰宅途中、総合博物館の玄関で一人の日本人男性が、とても大きな重い石を大変苦勞しながら急な傾斜のスロープを1階の踊り場まで押し上げようとしているのを見た。それもたった一人で。「お手伝いしましょうか。」と声をかけると、その方は申し出を受け入れてくれた。寺西先生であった。

その時から私たちは友情を育み、先生は私の師となり、私は先生の助手となった。私は歴史的に貴重な標本の準備について先生から多くを学んだ。それ自体、私にとって貴重な学びであった。というのも、私は神様の素晴らしい全宇宙の被造物—また空間、時間、そして永遠—の前に、畏れのあまり言葉もなく立ちつくしていたからだ。

寺西先生は私の拙い日本語を忍耐して受け入れてくれて、私たちは互いを理解し合えた。私が先生を訪ねるといつも迎え入れてくれて、そればかりか私が理解できない言葉や社会の仕組みに関するたわいもない質問にも貴重な時間を割いて答えてくれた。私の子どもや孫が海の方こうから訪ねてくる時、旅のハイライトの一つは博物館、そして先生の研究室を訪ねることであった。どんなに忙しくても、先生の心はいつも私たちに対してオープンで、北海道大学の歴史についてミニレクチャーをしてくれたものだ。そして何よりも、道内でよく見つかる小さな石を「友情の石」と称してプレゼントしてくれた。

この地上で最後に先生にお会いしたのは2020年11月2日、札幌駅北口にある北洋銀行の正面玄関であった。自転車をとめて、中に入ろうとすると、駅に向かって歩いている3人の日本人男性が

すぐそばを通り過ぎた。私は誰だか気がつかずに背を向けたところ、突然その一人が「ミスター・クルツ！」と叫ぶ声を聞いた。振り返ってみると、寺西先生が両手を広げて近寄って来たのだ。私たちは白昼公然、人目もはばからず抱き合った。その時の会話は何も覚えていない。しかし、寺西先生という真の日本人紳士から学んだ数々の心地よい思い出が溢れ出し私の魂を浸してくれた。その時には全く弱々しい感じはなく、まさか死期がすぐそこまで近づいているとは思ってもよらなかった。

次に先生の名前を聞いたのは、12月30日、星野先生からの一報であった。私の「先生」が12月20日に亡くなられたとのことだった。私は茫然とした。どんな知らせでも良いから、できることならそれ以外の知らせを聞きたいと思った。寺西先生は決して不満をもらすことなく、常に優しく、礼儀正しく、思いやりをもって接してくれた。まさか先生が病気だったとは夢にも思わなかったし、先生は私よりもずっと長生きをするだろうと思っていたが、それは現実とはならなかった。この優しくて慈しみ深い日本人紳士の思い出が、いつまでも人々の心に生き続けることを心から願う。

訳：伊豆洋一

(北海道大学文学部英語英米文学科、1986年卒業)



小樽みなと資料館 ひまわり号前で。中央に寺西さん。
(2012年11月27日)

活動報告

平成遠友夜学校の紹介

平成遠友夜学校 生徒 岡本敏博

「平成遠友夜学校」をご存知だろうか。北大キャンパスの北に位置する「遠友学舎」で、毎週火曜の夜開かれる市民向け講座のことだ。変わった学校だ。先ず月謝が要らない。誰もがいつ入学してもいいし、いつ退学してもいい。出欠をとることもない。要するに自分の都合に合わせて自由参加できる学校なのだ。講師は基本的に北大の教師や学生が務める。講義の内容は毎週異なり多岐にわたる。時代の最先端をいく研究の話から、何に役立つかは分からないが、可能性を信じて研究に没頭している話など、じつに幅が広い。

専門的知識を持ちながら生徒として参加している貴方が講師をされても一向に構わない。貴方の知見を社会に還元できる絶好の場でもあるのだ。

「平成遠友夜学校」は、開学してすでに16年が経つ。無趣味で無芸な私がリタイアを目前にし、この先どうしたものかと悩んでいた時この学校の開学を知った。65歳の時だ。間もなく82歳。以来自分でも良く続くものだと思いがちいまだに飽きることはない。16年の間には、結構生徒の出入りはあったものの、今も30人前後の方が目を輝かせながら集まって来る。

こんなユニークな学校がどうして誕生したのか。話は明治に遡る。北大の前身、札幌農学校の二期生新渡戸稲造。後に国際連盟の事務次長を務め、英語で『武士道』を著した国際人である。新渡戸稲造は、1894(明治27)年、貧しくて学校にも通えない子供や勤労青少年のため、私財を投じて無料で学べる夜学校を設立する。それが、「札幌遠友夜学校」だ。

月謝はいりません。学用品はあげます。先生は

諸君の友達です(札幌遠友夜学校のビラより)。札幌農学校の学生が無報酬で先生を務めた。有島武郎もその一人だ。1944年に閉校するまでの50年間に数千人が学んだといわれる。

「平成遠友夜学校」は、新渡戸稲造の精神を引継ぐべく、北大名誉教授で現平成遠友夜学校校長の藤田正一先生が2005年に設立した。教室の運営は北大の学生が担う(我々は教頭と呼んでいる)。講師の依頼、講義の進行などに当たり、無償のボランティアだ。講師もまた無償のボランティアである。会場の準備は生徒である我々市民が率先してすすめる。講義の後、茶話会が設けられている。その日の講師を囲み、教頭、市民が交流を深める。

藤田校長はこの学校のもう一つの目的を語る「大学で得た知識を市民に紹介し、社会に貢献するだけではなく、人に教えることによって学生も学ぶことができる」と。市民との交流は普段の大学生活ではなかなか経験できないことであり、市民だけでなく講師や学生にとっても学びの場となっていることは確かなようだ。

向学心に燃える方々、毎週火曜日の18時15分、「遠友学舎」を覗いてみては如何。



遠友学舎

※コロナ禍の現在は、3月末まで休講。

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 59

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、大山、久末、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2021年3月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>